

「なにこれ、かっこいい。」小学二年生のある日。私は初めて、あるロックバンドの演奏を聴き、心を強く動かされた。その時私はふと思った。自分もこんな風になりたいと。

小学三年生の春、「私もギターを弾きたい。」そう母に告げた。初めて手にしたちょうやハチドリをまとった茶色のギター。その頃は自分の手元にギターがあるという喜びで満ち溢れていた。「絶対上手くなる。」そう思っていたものの、うまくいかない。楽譜はわからないし、必死に弦を押さえてもへんてこな音しか鳴らない。加えて、指も痛くて血が出てくるのだ。「こんなに難しいと思わなかった。」挫折の二文字が何度も頭をよぎったが、どうにかギターを続けていた。

それから約一年。私はついに、少し弾き語りができるまでになった。うれしくて、まだまだつたない演奏を何度も母に聞かせた。母はいつも「すごい、めっちゃ上手くなったね。」とほめてくれるのでやりがいがあった。

ある日、こんなお誘いが来た。
「うちで一度ライブをしませんか。」

場所は金山から少し離れたお店のレストラン。緊張とワクワクの中、私は人生初のライブをした。「上手だね。また来るよ。」観客の温かい言葉がうれしかった。

それから月一でライブをさせてもらった。最初は楽しかったものの、私の気持ちはどんどん曇っていくことになる。

いつからだろう。もうギターなんて弾きたくない、ライブなんかしたくないと常に思うようになっていた。心当たりはあった。練習が足りないのだ。そのせいで、演奏がうまくいかなかったり、止まったりした。観客は明らかに盛り下がり、変な空気が流れた。それでも何も変わらなかった。要するに楽しくないからやりたくないという状況だ。「もうやめる。」という言葉が出かかって「本当にそれでいいのか。一度やめたら二度と戻れないのでは。」そんなことを考えて言い出せなかった。ダラダラと中途半端な日々が過ぎた。

突き指でもしようかと考えていたある日。久しぶりに好きなバンドのライブ映像を見た。感想はやっぱりめっちゃくちゃかっこいい。同時にかっこよさの秘密を初めて考えてみた。すると突然母の言葉が思い出された。「近頃のつきーは全然ダメ。そもそも練習してないでしょ。あのバンドだって最初からかっこよかったわけじゃないんだよ。」

その時私は当たり前のように気付いた。「そりゃあ、練習しないと上手くならないし、楽しくないよね。」ということに。私の好きなバンドはいつも私を楽しませてくれる。その抜群のパフォーマンスを支えているのが膨大な練習量なのだ。月に二回ほどしかふれていない、少しホコリをかぶったギターを引っ張り出して練習を始めた。いきなり毎日とはいかないが、確実に練習量は増えていた。するとやはり上達した。できることが増えることが楽しいと感じた。あんなに嫌だったライブでさえも、気持ちよく歌い上げると楽しいと思えた。「また上手になったね。」と言われた。練習を通して、私はギターが好きという気持ちを取り戻した。練習することは楽しいのだ。さまざまな人に声をかけられ活動の幅も広がった。現在はキャンプ場や観光地のお店などでもライブを行っている。

変わったのは一つだけ。努力は楽しさにつながると気付いたこと。今何かに挑戦している人、挫折しかかっている人に伝えたい。努力から生まれる楽しさがあるということ。

私はあこがれのロックバンドのように、これからも弾き語りライブを続けるつもりだ。練習の中で得られた楽しさで、誰かの心を強く打つ音楽を届けたい。私はこれからたくさんのことに挑戦するだろう。努力を惜しまず、好きを手放さないように生きていきたい。